

MAKEN no DAYDREAMER

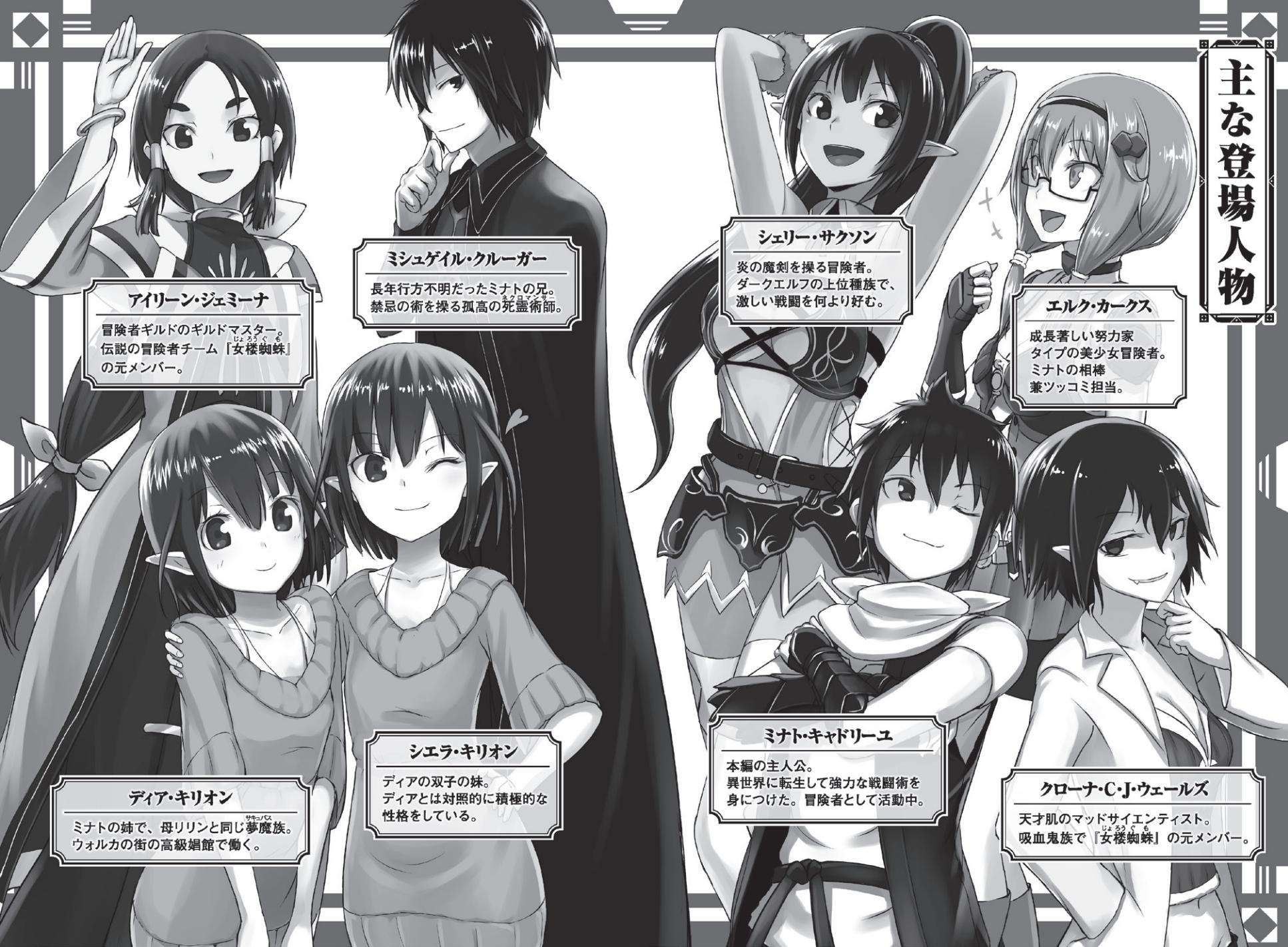
魔拳の アトリエ

9

NISHI OSYOU
西和尚

ILLUSTRATION : Tea

主な登場人物



第一話 『邪香猫』魔改造計画・前編

「…………もりだい、クローナ？」

「ん？ 何がだよ アイリーン」

時刻は昼前。

暗黒山脈にあるクローナ邸、その私室。

ミナートとクローナとの模擬戦^{もぎせん}、及び『勧誘』の後、アイリーンとクローナはどわいからひ出す
でもなく、この部屋に集まつた。

そして、クローナの開けたとつておきのワインを酌み交わしてくる。

「わかつてゐくせに聞き返すものじやないよ……ミナト君を弟子に取るなんて、一體どいつ風の
吹き回しだ、って聞いてんのさ」

「へへへ、それこそ聞く必要ねーんじやねーか？ 俺の性格を考えればよ」

「…………君の性格を知つてゐるからこそ、惑つてるんだよ。昔つから^{とま}面倒なことや興味の無いことはと
ことん無視して、自分のやりたいことだけを全力でやって来た君が弟子を取るなんて、天地がひつ

くり返つてもありえないと思つてたからね」

アイリーンが知る限り、クローナ——天才的な研究者である彼女が、誰かのために自身の力や知識を使うことは、ほぼなかつた。

かつて同じ冒險者チーム『女楼蜘蛛』に所属し、ともに大陸中で暴れまわった数十年間でも、数えるほどしかなかつたはずだ。

ミナトにした説教の通り……慈善も偽善も嫌い、否定し、自分のためにだけ、その力を發揮してきたのである。

龍をねじ伏せる力も、あらゆる分野に精通した知識も、多種多様なマジックアイテムを作り出す手腕も、他者のために使われることはなかつた。

その力を欲する者は多く……戦力として、頭脳として、国家や巨大組織は何度も勧誘した。

弟子入りを志願された回数も数えきれない。それら全てを『面倒』の一言でバッサリと切つて捨てていた彼女が、自分から弟子を取り育てるなど、アイリーンは想像もしていなかつた。

その話を聞いたクローナが獰猛な笑みを浮かべる。

「なアに、大したこつちやねーさ。おめーやテーガンが昔言つてたみてーに、次の世代つてやつを、わと育ててみたくなつただけだよ。マジで、純粹にな」「ふーん……そんなに気に入つたの？ ミナト君のこと」

「ああ、氣に入つたね、絶対逃がしたくねえ、つて思つくらいにな。あんだけの才能を持つていながら変な妄想もせず、肝も据わつてる奴なんざ……五世紀以上生きてて初めて見た。ありやぜひとも鍛えてみてえ。鍛え上げて、研ぎ澄ませて……」

そこでクローナはワインを飲み干し、グラスを叩きつけるように置いた。

「その果てに一体、どういう化け物が出来上がるのか……この目で見たい」

口から覗く牙をギラッと光らせ、満面の笑みで言い切つた。

対するアイリーンはいつもの笑顔だが、目だけは笑つていなかつた。

「苛烈な物言いはいつものことだけど……一応確認しておくよ。あくまで、育て甲斐のある弟子として、彼を気に入つたんだよね？」

「くくっ、実験動物として見始めたとでも心配してたか？ 安心しろ、んなこたねえよ。むしろそんなふうに使い捨てられる奴なら、最初から興味なんぞ持つてねえさ」

クローナは嬉々として話す。

グラスをスッと掲げ、メイドに一杯目のワインを注がせながら。

「昨日お前から聞いたとおりだつたよ……あいつはリリンに似てる。けど見た感じ、むしろリリン以上に、俺に近い気がしたね」

図らずもこの屋敷に来る直前、アイリーンがミナトに対して言つたことを、クローナ本人もまた口にした。

「あいつの考え方は俺に近いし、才能もある。それこそ、魔法の開発や研究の分野なら、明らかに現時点でもリリンを凌ぐ。ああ、これは客観的な分析で、色眼鏡とか全然入ってねーぞ?」

「わかつてゐよ。正直、ボクも同意見だ」

「ならもうわかるだろ? 俺があのガキに心惹かれた理由つてもんがよ」

一拍置いて続ける。

「あれは磨けば光る。鍛えれば伸びる。しかもあいつ夢魔サキュバスたる? 見たところまだ『覚醒』もしてねえようだし、伸び代よしろどんだけだつて一話だよ。まだまだ、どいまでも、いくつでも化けるぜ? そして……」

「そして?」

「きつとしつか、俺達と同じステージまで上つてくる。やつ遠くない未来に、な」

「……そんな、将来有望な超新星の中の超新星に、五百年の人生で学んできた全てを伝えてやりたい、と思つたわけ?」

「ああそうさ。あいつなら俺の全てを受け継いだ上で、それを超える化け物になる。何でか知らねーが、そう確信できるからな。くくく、初めてだよ。初めてだし、考えもしなかつた。俺を超える可能性を持った奴に出会うなんて……そしてそれが楽しみだつてのも」

言い切つて、泣がれたワインをまたしても一気に呷り、グラスを空にする。ふはあつ、と気分よやかにつに息をつく。

アイリーンは田の前の友人の笑顔が、酒で気分が高揚したからか、それともこれから始まる、ミナト風に言えば『魔改造』プランに夢を膨らませてゐるからか、判断できなかつた。

(……まさか、ミナト君自身が『魔改造』されることになるとはね)

「止めてムダだぜ、アイリーン? 俺はあのガキを、満足するまで、あらゆる方法で鍛え上げる。魔法やマジックアイテムの共同研究なんかもしてみてーな……くく、どうせなら本気で世界最強とか曰指してみるかな! あー楽しみだ!」

「はあ……今になつて思つんだけど、よく考えたら君とミナト君つて、いわゆる『混せるな危険』って奴だったのかもね……手遅れだけど」

仕事の都合で、まもなく帰らなければならぬアイリーンは、ミナト以下『邪香猫』メンバーの今後を思つて、ため息をついた。

そして、自分もグラスに口をつけ、ぐじつと半分ほど飲み下す。

(しかし、クローナがここまでやる気となると……ミナト君、次にウォルカの街に帰つてくるときには、一層アレなことになつてゐんだろうな。となれば……もう、AAAランクでも、彼の実力には足りないかもなあ……)

同時に、自分はこれからどう動くべきなのか。

そう考えたアイリーンは、呆れとも諦めともつかぬ息を、もつ一度ついたのだつた。

「……おーい、ミナトー？」

「…………」

「ミ・ナ・トー？」

「…………」

「…………つたく」

——「ゴツ!!

「あがつ!?」

「え、何、今の百科事典で殴られたみたいな感じの钝器インパクト!?」

「そりやまあ、実際にそれくらい大きい本で殴ったからね」

「ああ、エルクか」

「つたく……相変わらず集中すると何も聞こえなくなるわね、あんたは『ははは……ごめんごめん。いや、あまりにも面白い本だったもんでさ』

僕ことミナト・キャドリーウは、体の検査を含む色々な用事を済ませるため、王都ネフリムを出

てここ……母さんの旧友であり元『女楼蜘蛛』メンバー、クローナさんが住む邸宅にやつて來た。

そして、流れでクローナさんに実力を見てもらうことになり、模擬戦という形で彼女——生ける伝説たる『冥王』めいおうクローナに挑むこととなつた。

結果はまあ、当然のごとく完敗。

というか、勝負になつてたかすらちよつとわからない。

まあ、この結果はいい。

母さんと同じレベルの実力者相手に、勝てるとは思つてなかつたし。

問題はその後。

なぜかすつごく嬉しそうに笑つていたクローナさんに……こう言われた。

「ミナト・キャドリーウ。お前……俺の弟子になれ！」

その誘いを受諾した僕は今、精霊種『シルキー』のメイドさんに案内してもらい、城の書庫にいた。

クローナさんとアイリーンさんの話が終わるのを待つ間、面白そうな本を片づ端かたから読みふけっていたのだ。

クローナさんの『弟子になれ』発言に、当然ながら僕はかなり驚いた。

一応ちよつと時間をもらつてエルク達と相談した。

その結果、最終的に、こんな機会は滅多にないつてことで、受けたことにした。

「僕と一緒に、他の『邪香猫』メンバーの訓練も、気が向いたら見てもらえないか」つて尋ねたら、了承してくれたしね。

繰り返すけど、伝説と言つてもいい『女楼蜘蛛』のメンバーに稽古をつけてもらえるなんて、そうあるもんじやない。

基本的に向上心が高いうちのメンバーは、戸惑つてはいたけど、それぞれやる気を滲ませていた。本格的な修業は明日から始めるらしいので、手始めとしてこの『書庫』で、クローナさん秘蔵の文献を片っ端から読ませてもらつてるんだけど……これがもう宝の山。

クローナさんの性格なのか、はたまたシルキーメイドさん達が優秀なのか、ジャンル別にきちんと整頓されている。

ここには……僕の主観も混じるけど、興味深い本が目白押し。

面白い魔法書物や、古代の珍しい魔物の記録。

さらには亜人の古代種族に関する記録や、どこで手に入れたのか、いろんな国的重要機密書類まで……なんなんだこの魔窟まくつは。

亜人関連の本にはミュウちゃんが、機密書類にはザリーが興味を示し、手に取つていて。

ザリーがそれらに接した結果、何が起るかは……精神衛生上よろしくないので、あまり考えな

いでおこう。

ナナさんとエルクは持ち前の勤勉さを發揮し、役に立ちそうな本を探して読んでいるが……活字が苦手なシェリーサンだけは早々にリタイアしていた。

今？ 机に突つ伏して寝てるよ。

……で、僕が読んではるのは、その中でも極めて特殊なもの。

クローナさんが若い頃に手がけた、魔法関連の研究内容を記録した論文である。

ナナさんやザリー曰く、学者でもない限り読む者がいないらしいそれは、どれも僕の興味を非ツ常せんじょう～にそるものだった。

革新な術式、思いがけない発想、そして僕の目から見て、まだ改良の余地がある魔法の数々。

それらを目にして、何とも言えない高揚感を覚えた。

また、クローナさん以外の研究者が手がけた論文もたくさんあつた。

クローナさんのよりめんどくさい言い回しが多く読みにくかつたけど、やっぱり興味深い。

研究段階で判明した、新事実や新法則なんかがいくつかあつたものの、僕が前世の学校で普通に習つたことだつたりしたので、理解に困ることはなかつた。

この短時間で読めた本は、氷山のほんの一角だ。

ぶつちやけ今の本音は……ここにある論文を全部読みたい、なのである。

「あのややこしい長文をよくもまあ……あんたつてもしかして、学者に向いてるのかしら？」

目が疲れたのか、隣で本を閉じて休憩しているエルクが、六編目の論文に手を伸ばす僕を見ため息混じりにそんなことを言つてきた。

「いや、多分そんなことはないけどね……クローナさんがさつき言つてたように、ただ面白いからやつてるだけだし」

「そういう所が『天才』って奴なんでしょうね……はあ、そんなんだから私達は……」「うん？ 何？」

最後のほう、声が小さくてちょっと聞こえなかつたんだけど……何か言つた？

「何でもないわよ。さて、休憩終わり……つと」

エルクは眼鏡をハンカチで拭いた後、手近にあつた本の、しおりが挟んであるページを開き、再び読み始めた。

……別に大したことでも無さそうだつたし……いいか。

そう思つて再び論文に目を落とした僕は、このとき気づかなかつた。

エルクと似たような視線が、ナナさんやミユウちゃん、さらにはシェリーさんからも向けられていたことに。

☆☆☆

明けて翌日、いよいよクローナさんの稽古が始まった。

前の晩に配られた稽古着——見た目はほぼジャージ——に着替えてから、前日も使つた『運動場』に集合する。

昨日あれだけクローナさんが暴れて破壊された部屋。しかしその痕跡はどこにも見当たらず、キレイに修復されていた。

聞けばこの部屋は、破損してもすぐに自己修復するらしい。

ある種のスライムを解析して作った、クローナさんオリジナルの生体金属で、壁や床のタイルが出来ているからだとか。

僕が自分でもわかるくらいに目を輝かせていたら、「早めに修業が終わつて余裕があつたら、そのあたりの授業をしてやつてもいいぞ?」ってクローナさんに言われたので、頑張ろうと思う。便利なマジックアイテム作り……オリジナルの……うん、心躍る。

え、隣でエルクがジト目で睨んでるって？

わかってるよ、そんなことは。

そんな僕を面白そうに眺めるクローナさんは、何の変哲も無さそうな黒のワンピースに身を包んでいた。

動きやすさはあるけど、あの服装で稽古をつけてくれるのかな？ てことは……。

「よし、いいかお前ら？ まず最初に言つておく。いつも通り俺は下着なんざ面倒くせえからつけ

てねーが、俺が訓練に参加するにはまだ先だ。だから……動いた拍子にスカートの中が見えそうだの何だの、期待とか心配とかしてたマセガキは安心しろ」
開始前の訓示とばかりに、クローナさんが僕ら六人を見渡して言つた。

みんなの視線が痛い。

「さて、注目！ 俺に言わせれば、強くなるためにやることなんざ三つだけだ。東洋の国には、何かを窮めるに当たつて『心技体』つていう概念があるそうだが……そんな感じでな」

すつと手を突き出し……三本指を立てたクローナさん。

「まず『腹を決める』、次に『技を覚えて窮める』、んでもひとつ『地力を上げる』……これだけだ。俺の弟子になる以上、中途半端なんぞ認めん。徹底的にやるから覚悟してついて來い。じや、始める」

相変わらずかなり苛烈な激励というか発破をかけた後、クローナさんは腰のポーチから、握りこぶし大のガラス瓶を取り出した。

その中には透明な、しかし明らかに水じやないとわかる、どろつとしたゲル状の何かが入っていた。

クローナさんは瓶の蓋を開けると、中身をドバッと床にぶちまける。

ゲル状の何かはすぐに、床に染みこんで見えなくなつた。

それを確認すると、クローナさんが蓋を閉めながら、説明を始めた。

「さて、この訓練場に使われている生体金属にはいろんな特殊能力があつてな。俺がこうして『エサ』を与えてやることで、異なる能力が発動する。そのひとつに『擬態能力』つてのがあるんだが……おつ、きたきた」

何かに気づいたように、足下に視線を落とすクローナさん。

見ると、クローナさんが瓶の中身をぶちまけた部分の床が、なんだか波打つていていた。クローナさんが二歩後ろに下がる。すると数秒後、床からなんと……白骨の魔物が這い出てきた。

人間の骨のようだけど、その構造は明らかに異形。頭蓋骨はふたつ、足は三本ある。

腕は四本で、それぞれ剣を持っている……つてコイツ、見覚えあるな。

そうだ。細部は違うけど、幽霊船オルトヘイム号の中で見た、『オーバースケルトン』つて奴じやない？

驚き戸惑う僕らを、満足そうに見ていたクローナさんが口を開く。

「とまあこんな風に、『エサ』に応じた魔物に擬態するんだ。その強さや動きもトレースしてな。

そしてコイツは、攻撃されるか、創造主である俺が合図すると、凶暴化して襲いかかる……さて、俺が言いたいことがわかつたか？」

「えつと……コレを相手にバトれと？」

「そういうことだ。ちなみにコイツは……そこのピアス、お前の相手だ」

「えつ、僕？」

いきなり、しかもかなり雑に指名されたからか、ザリーが驚いて声を上げた。

「そうだ。基本的に一対一。本気でやれば勝てる強さの魔物をチヨイスする。種類は別々。じゃ、他のも出すぞ」

クローナさんは、ザリー以外はついてくるように言つて歩き出した。

それを六回繰り返し、訓練場に六体の魔物を作り出した。

ザリーの相手は、さつき言つたとおり『オーバースケルトン』。

エルクの相手は、体が砂や小石に覆われた大きなサル『サンドエイプ』。

ミュウちゃんの相手は、ただの『スライム』。

ミュウちゃんが『ケルビム族』だと看破して、召喚獣は使わず自分の魔法だけで倒すこと、という条件付きた。

ナナさんの相手は、ドラゴンの骨が魔物化した強敵『スケルトンドラゴン』。

シェリーさんの相手は、なんとなつかしの植物怪獣『トロピカルタイラント』。

そして、他の五人からだいぶ離れた場所に現れた僕の相手。

大きな翼と長い首を持ち四本足で立つそいつは……ダンプカーディーの巨体で、獰猛な目をぎらつかせていた。
これつて……。

「……あの、僕いきなりドラゴン系なんですか？　てか、めっちゃ強そうなんですけど」「『ファフニール』な、そいつの名前。ランクはA A Aだから、油断しなきゃ勝てるだろ」

当然のようにさらりと言つてくれたクローナさんは、近所の猫でも見るような目で、凶悪この上ないビジュアルのドラゴンを見ていた。

「訓練の間、持つといてやるよ」と、僕のペット、アルバを手に乗せて。

クローナさん曰く、『ネヴァーリーデス』の生態はある程度なら把握しているが、専用の訓練メニューを用意できるほどではないという。
なので、アルバはまだ待機だ。

……つてか、アルバも鍛えるんだ？　そいつ、これ以上強くなるの？

六人全員が、やや顔を引きつらせているのを確認してから、安全圏のベンチに戻ったクローナさん。

「じゃ、始め」
ぱちん、と指を鳴らす。

広い訓練場によく響いた音を合図に、魔物達が凶暴化して、戦闘開始となつた。

どうやら何らかの処置、設定が施されていたらしく、魔物は自分の相手以外に襲いかかつたりはしない。

しかも開始と同時に半透明の壁が出現し、バトルフィールドが明確に分けられた。

そのおかげで、巻き込む、または巻き込まれる心配がなくなり、一対一で戦えるようになつた。

最終的には、十五分ほどで全員が討伐に成功。

一番早かつたのは、きちんと魔法を練習していく、Fランク程度なら相手じやなかつたミュウちゃん。

『ファイアボール』で簡単にスライムを蒸発させた。

それに対して、一番てこずつたのは僕だ。

擬態といつてもさすがに『龍族』だけあり、当然のように空を飛ぶし炎まで吐いてきて、かなり手ごわかつた。

翼と足四本を全部潰した上で、『ダーケネスキック』で首の骨を、脊髄ごときつちり粉碎すると、ようやく倒れてくれた。

魔物の体はドロドロに溶けて床に染みこみ、痕跡を残さず消滅した。

いや、さすがというか、正直言つてドラゴン系を舐めてたな……。

ディアボロスもそうだつたけど、頑丈さが他の魔物とは全然違う。

ちよつとのダメージならすぐ回復してしまうし、こりやもつと本格的に鍛えないとな。
とか思いつつ、休憩しようと床に座ろうとした絶妙なタイミングで、声が掛かる。

「よーし、じゃ、次いくぞー」

え……『次』？

視線を上げると、いつの間に近づいてきたのか、当然のように『エサ』という名のゲル状物質を床に垂らすクローナさんがいた。

「ん、何だその顔は？ 言つとくが俺の方針は『一に実戦、二に実戦、三、四がなくて五に実戦。最低でも実戦、最高でも実戦、兎にも角にもとりあえず実戦』だからな。訓練すべき事柄は戦闘の中に盛り込んで、予習も復習も、戦いの中で全部やる。そのつもりでいる」

「……マジですか」

「情けねー声を出すな。おら、開始までにきつちり觀察して、戦うプランでも考えてろ。それも必要な技能のうちだぞ？」

うん、覚悟してはいたけど……予想以上にスバルタな訓練になりそう。
あらためて腹を決める僕の前で、今度は全身毛むくじらで、異様に首の長い牛の魔物が姿を現した。

「……えつと、これは……」

「カトブレバス」。ランクはAAA。一般に『邪眼』と呼ばれる能力を持つていて、目を見ると死ぬ

「死ぬですか!?

「『夢魔』なら耐性があるし、大丈夫だから安心しろ。ってか、擬態だからそこまで強力な能力は模倣できねーさ。強いから油断はすんなよ?」

「……さいですか」

結局この訓練は午前中いつぱい続いた。

油断できない相手と何連戦もしてものすごく疲れた僕らは、昼食時間とその前後の休憩時間、完全に沈黙。

AAAからAAAの敵と戦わされた僕はもちろん、ミュウちゃんも実力を把握され、二回目からは結構強めの敵と戦っていた。

他のメンバーも同様だ。

誰も大怪我をしなかつたのは幸いだけど、もし午後にも同じ訓練をやらされたら、果たして耐えられるんだろうか……。

僕らは全身に満遍なく疲労を感じながら、ひたすら回復を待っていた。

第二話 『邪香猫』魔改造計画・後編

午後。

意外にも、心配していたデスマーチ的な事態にはならず、まるまるお休みだった。
明日に向けて休んで、疲れを取れと。

というのも、どうやら午前のバトル強行軍は、僕らの動きや使える魔法、とつさの判断力なんかを実戦の中で見極めるためのものだつたらしい。

明日からは、また違った感じの訓練メニューを組んで、本格的に鍛えていくとのこと。

ただし午前中に言つたとおり、それらは全て『実戦』の中で行うので、安心なんて出来ないんだけどもね。

そして……夕方になるちょっと前ぐらいの時間。

僕はクローナさんに呼び出され、シルキーメイドさんの案内で部屋に行つた。
中に入つてソファに座られた次の瞬間。

「小僧、俺の目を見ろ」

「へ? 目つてなに……」

そんなことを言われた直後。

視界がぐらつと歪んで、めまいがして、気がついたときには……。

僕は大きなベッドの上に、全裸で転がされていて、同じく全裸のクローナさんが僕に馬乗りになっていた。

「……あの、これ一体、どういう状況ですかね？」

「ん？ 意識あるのか、さすがだな……ああ気にすんな。すぐ終わるから」

「無理ですよ！ え、ちょ、何が始まるんですか？ 何されるんですか僕？」

ですかクローナさん!? ねえ、ちょっと!?

業の叫びをウコリナセ^{さけ}は全く聞く様子がなかつた。

縛られたりしていなにもかかわらず、手足どころか体が一切動かず、自由に動かせるのは首から上だけ。

そんな状態で、僕のちょうどお腹のあたりにぼすつとクローナさんが座っていた。
いかに柔らかい肌の感触が伝わってきて……い、いくらなんでもコレは……。

傍から見たら、インモラルなことこの上ない。

このあと何が起ると思うかって第三者に聞いたら、百人が百人、同じ答えを返すだろう。白眼

クローナさんは僕の心中などお構いなしに、僕の腕とか、腹とか、首筋とか太ももとかをぺたぺ

だと触つて、『結構いい体してんのな』などと言う始末。

そのたびに、体の各所に手のひらの感触を感じる。思春期男子を悶死させる気なんだろうか、こ

の全裸吸血鬼は。

そして、おそらく顔が真っ赤になつてゐる僕に構わぬ、クローナさんはその、色白で細くてキレイな手を、僕の胸の上にとんつと置いた。

一一〇

クローナさんの手が胸板を貫いて一気に、僕の体内に手首のあたりまで沈み込んだ。

元元元元元?

かこのバカヤギ!!!

「見りやわかんだろーが！ 依頼されたとおり、テーマの体の検査してやつてんだよ！」

見てもわからぬーよ絶対!!

さっきまで真っ赤だった僕の顔は、今は真っ青になつていてるんだろう。

脳のど真ん中に突き刺さった矢口一茶さんの手。
体の中に異物が入った超弩級の違和感が、はつきりと伝わってきた。



痛みは無いし血も出ないけど、皮膚や筋肉を通り抜けて入った、って感じだ。

しかも、僕の体の中で絶えず動いていて、いろんなとこをいじくられているような……。

「触診つてあるだろ？ あれの親戚みてーなもんだよ。『幻想空間』なら、体の情報が百パーセント反映されるし、俺の解析術式でほぼ全ての情報を読み取れるからな」

当たり前のようにそんなことを言つてくるクローナさん。

この数秒の間に、いやらしいこと考えて興奮する心の余裕なんてなくなつた。生きたまま体の中に手を突っ込まれて色々触られるつて、一体どんな不思議経験……。

「つて、あれ？ 『幻想空間』？」

「何だ、気づいてなかつたのか？ さつき俺と目を合わせたろ？ その時に、お前の精神をここに連れてきたんだよ」

『幻想空間』……？

精神世界つていうか、心の中の世界つていうか、ファンタジーだと比較的おなじみの空間？

「あ、じゃあもしかして、知らない間に服を全部剥ぎ取られたのとか、手足が動かないのとかも、そのせいですか？」

「そういうこつた。体を調べんのに服は邪魔だろ」

「……クローナさんの服は？」

「面倒だから構成しなかつた」

……さいですか。

「つか、ホントは検査してると、ずっと寝てるようにならうんだが。つたく夢魔サキナバつてのは、精神攻撃耐性がやつば高たかいわ。目を合わせて引き込む時も、かなり抵抗感があつたし」

「あ……じゃ、体が動かないのはそれ——あうつ!」

「おつと、悪い。……背骨かコレは。じゃ、これが多分胃袋で……」

話しながらもクローナさんは、僕の体の中で手を動かし続け——つて、いつの間にか両手が入つてるよ!

触られるような、握られるような違和感が、絶え間なく僕の体を襲つている。

「……これって、内臓とか触つて調べてるんですか?」

「その周辺の筋肉組織、骨、神経なんかもな。ああ、あと、触るだけじゃねーぞ? 触診が終わつたら、実際に取り出して調べるからな」

「……はい?」

え? 何で言つたこの人?

「取り出して』『調べる』!? どうやつて!?」

「そりやお前、普通に切つて取り出すけど……」

「僕この後、生きたまま解剖かいぱうされるんですか!」

「痛みはねーはずだし、幻想世界でならいくら切つても死なねーよ。何なら……ちつと面倒だが、

感覚も消してやる。二時間くらいで全部終わるから、黙だまつて待つとけ。全ては高い精神攻撃耐性のせいだ眠れねーお前が悪い」

「…………はーい」

何だか反論する気力がなくなつた僕。

しばらくの間、生きたまま内臓をいじられるという、トラウマになりそうな未知の感触に身をやだねることにした。

ま、まあ、二時間くらいで終わるんだ。痛みがあるわけでもないし、気にしないよう我慢がまんしてればなんとか……。

「ついでに言つとくと、眼球、脳、舌、●●●も調べるから、体中を切り刻んで細かく見せてもらうつもり——」

「…………」

「……捨てられた子犬みたいな目で見んな」

結局、クローナさんのお情けで、切開する前にワントクッション入れてもらつた。

具体的には、切開の直前、クローナさんは僕を一旦『幻想空間』から解放した。そして現実世界

で、生身の僕にある薬品を飲ませた。

飲むと一瞬で意識が混濁こんだくし、精神が酷ひどく無防備な状態になる凶悪な薬だ。分類としては猛毒で、普通の人が飲むと一時間足らずで死ぬらしい。

立ち読みサンプル はここまで

尋問と口封じが一度にできる白白剤みたいなもんか？怖いなおい。

常人なら、水で百倍に希釈したものを数滴摂取しただけでも十分効くんだけど……僕にはなかなか効かなかつたので、最終的に原液をジョッキで一杯も飲む羽目になつた。

しかもその毒、味が酷くて……いや待て、コレは言い方が正しくないな。

苦いとか辛いとかだつたらまだよかつたんだけど……あれは『味』ですらなかつたし。

前世で食べたことのある、強力眠気覚まし用のガムとか飴、あの味だ。食べると口の中がスーッとして、めっちゃ寒くなつて……その状態で水とか飲むと悶絶しそうなくらい冷たく感じるアレだ。

それをジョッキ一杯という、これ自体も苦行のような救済措置をどうにか完遂した僕は、次の瞬間クローナさんにまた『精神世界』に引きずり込まれ……目が覚めた時には、全てが終わつていて、

僕は部屋のベッドで寝ていた。

どうやら上手く『眠れた』ようだ……ほつ。

……眠つてる間に僕の体は、精神世界でとはいえ、バラバラもズタズタも通り越して、量り売りが出来るくらいに細かく切り刻まれたんだろうけど。……ま、気にしない方向で。

☆☆☆

翌日からも、訓練は……クローナさんの最初の宣言どおり、ひたすら実戦の中で行われた。

基礎を確認するのも実戦。

問題がある動きを矯正するのも実戦。

新しい技能を学ぶのも、概要を簡単に聞いてちょっと練習して、すぐ実戦。

予習も復習も、兎にも角にも全部実戦。

『訓練場』の魔物擬態システムは、最大でAAAランクの魔物まで用意できるという。

どうも、あのタイルの材料になつた魔物がそれ以上のレベルだから可能らしい。どんだけ強いスマイルだつて話だ。

その種類も実に多様。なので……その時々の目的に合つた相手を用意できるわけである。

魔法の訓練をしたければ、魔法しか効かない魔物を。

素早い動きを鍛えたければ、動きの素早い魔物を。

攻撃の精度を上げたければ、弱点もしくは体が小さい魔物を。

各自が鍛えるべき点を考え、それに必要な訓練と、それが出来る相手をチョイスして戦う。

そして、目当ての技能が身につくまで何度も繰り返す。
ちょうど学校の時間割みたいに、一～二時間ごとに区切つて課題を与えることで、疲労回復と集中力の持続なんかも考慮している。